

「WOOD JOB!～神去（かむさり）なあなあ日常～」

★★★★

2014（平成26）年2月17日鑑賞<東宝試写室>

監督・脚本：矢口史靖
原作：三浦しをん『神去なあなあ日常』（徳間書店刊）
平野勇氣（高校を卒業した若者）／染谷将太
石井直紀（清一の妻の妹）／長澤まさみ
飯田予喜（ヨキ）（中村林業株式会社の社員）／伊藤英明
飯田みき（予喜の妻）／優香
中村清一の妻／西田尚美
／マキタスポーツ
／有福正志
／近藤芳正

中村清一（中村林業株式会社の社長）／光石研
神去村の村長／柄本明

2014年・日本映画・116分

配給／東宝

<『ロボジー』ほどの意外性はないが、矢口ワールド満載>

三浦しをんの原作『神去なあなあ日常』を知らない人は、本作のタイトルを見て、こりゃ一体ナニと思うはず。そもそも「神去」を「かむさり」と読める人はいないだろうし、「なあなあ日常」って一体ナニ？

矢口史靖監督の作品らしく、本作のチラシには「少年よ、大木を抱け。」「誰も見たことのない、爆笑と感動と衝撃の青春林業エンタテインメント!!」と書かれてある。しかして、「神去」とは、大学受験に失敗し、彼女にも振られてしまった18歳の平野勇氣（染谷将太）が目指した林業の村、神去村のこと。また、「なあなあ」とは、村のおばあさんたちが使う言葉で、「ゆっくり行こう」という意味らしい。09年から11年まで足掛け3年にわたって放送されたNHKテレビドラマ『坂の上の雲』にも登場したことによって、少しは「全国区」になった、私の故郷・松山市の言葉なら、さしづめ「だんだん」というところ・・・。

矢口監督の『ロボジー』（12年）は矢口ワールド全開のうえ、「意外性」満載の「快作」だった（『シネマルーム28』239頁参照）が、さて、本作は？美女、長澤まさみが微笑んでいるパンフレットを見ただけで、神去村の一年間の林業研修プログラムへの参加を決めてしまう勇氣の行動は意外。さらに、そんな田舎での林業の研修生活は3日も持たないだろうと思っていたら、意外にも・・・。本作は序盤から中盤への展開の「意外性」は『ロボジー』ほどないが、それでも「意外性」が連続するうえ、クライマックスでは大きな「意外性」も・・・。

<田舎暮らしは？林業労働は？>

今ドキの若者にとっては、携帯がつながっていることは生きるうえの最低条件。しかも、コンビニがあり、カラオケがあり、ウォシュレットがあることに慣れて切っているから、勇氣がはじめて訪れた神去村での田舎暮らしに戸惑ったのは当然。まして、研修生に実技を教える中村林業株式会社の飯田予喜（伊藤英明）が、あんなに荒っぽく研修生に接したら、数日で半分が逃げ出すことは、我が事務所の厳しい研修ぶりに対比しても明らかだ。案の定、勇氣は研修が始まってすぐ寮から逃げ出そうとしたが、そこにはすでに脱走しようとする先輩が・・・。もともと、勇氣をバイクに乗せて駅まで送ってくれたのが、あの表紙で見た美女、石井直紀（長澤まさみ）だったため、勇氣はもう一度寮に戻ってきたが、その是非は？

無事1カ月の研修を終えた研修生たちはそれぞれの現場に配属されたが、勇氣の配属先是最悪の神去村。しかも、勇氣が寝泊まりするのは予喜の家だ。そこには、意外にも予喜との子作りに励んでいる妻・飯田みき（優香）や、勇氣にまむし酒を勧めてくれるしげ婆さんがいたが、そんな状況下での勇氣の生活は最悪。さらに、林業の仕事は想像以上の重労働で、初日から崖下に突き落とされた勇氣は泥だらけ。そのうえ、ヒルに吸い付かれた勇氣は素っ裸にさせられたうえ、ライターでヒルをとってもらったが、そんな「武勇談」から勇氣は村の子供たちから「ヒル」というあだ名で呼ばれることに。さあ、勇氣はそんな田舎暮らしと重労働にいつまで耐えられる・・・？

<この美女はなぜここに？見えざるバリアーとは？>

戦後、東西に分断されたドイツには「ベルリンの壁」があったし、南北朝鮮も「38度線」で完全に分断されている。また、日本維新の会も政党としては1つだが、東の維新と西の維新は実質的には別モノ・・・？予喜が冷やかしのように1年間だけの研修で神去村にやってくる都会の若者たちを嫌うのはよくわかる。しかし、直紀のような、都会の若者に憧れてもおかしくない年頃の美女が、なぜこんな田舎に住み続け、勇氣に対して悪態をつくの？それは、都会からやってきてこの村に住みつき、直紀と結婚寸前までいった若者が、結局直紀を捨てて都会に戻ってしまったという悲しい体験のためらしい。なるほど、なるほど・・・。

直紀は中村林業株式会社の社長である中村清一（光石研）の妻の妹で、子どもたちに勉強を教えている毎日だが、ホントにそんな生活で満足しているの？そんな視点で本作中盤に見る、勇氣と直紀の恋愛模様（？）を観察していくと、きっと面白いはずだ。直紀が勇氣を見直すきっかけになったのは、山の中で行方不明になってしまった神去村の村長（柄本明）の孫を勇氣が探し出してきたため。その行動には山の中に住んでいる「神サマ」の存在が大きく効いているから、私たち都会人も少しは「山の神」に対して敬虔な気持ちを持ちながら、そのストーリー展開を楽しみたい。

<「巨木」移動のド迫力にビックリ！>

田舎にいけばいくほど、年に一度の「お祭り」が大切なイベントになる。したがって、林業で暮らしているチョー田舎の神去村では、「木の神サマ」を奉る年に一度のお祭りは大切な行事。勇氣は今、1年間の研修の終了を控えて、一人前近くに育っていたが、まだ村の男とは認められていないから、祭りに参加できるかどうかは微妙なところ。村長はどうせ都会に帰ってしまうはずの勇氣のような若者を神聖な村の祭りに参加させることに反対したが、ここでは予喜が強硬に勇氣は村人の男の一人であると主張したから、意外。さらに、例の孫捜しの一件があったため、村長も渋々（？）勇氣の参加を認めることに。

私は中学生の時に、『十戒』（56年）を見たが、そのクライマックスはユダヤの民を率いてエジプトを脱出しようとするモーゼの目の前の海が割れていく大スペクタクルシーンだった。そんなシーン以外になぜか私がよく覚えているのは、導入部に見た、モーゼが父親から命ぜられた都市建設のため、巨大な石を巨大な仕掛けを使って移動させるシーン。よく考えてみると、その頃から私は「都市問題」に興味を持っていたわけだ。さらに、日本では今41歳のレジェンド、スキー・ジャンプの葛西紀明選手を中心とした「日の丸飛行隊」「復活」の話題に湧いているが、本作では切り取った巨木をレールの上を滑らせて移動させる大スペクタクルシーンのド迫力にビックリ！

<19歳の決断は？映画としては上出来だが・・・>

ソチ五輪でスキー・ジャンプの葛西選手は、個人では銀メダルを、団体では銅メダルを獲得した。しかし、ノルディック複合ラージヒルでは、加藤大平選手がジャンプの着地に失敗し、左肘の脱臼と骨折のケガをしてしまった。こんなシーンを見ていると、スキー・ジャンプがいかに危険な競技であるかがよくわかる。それを考えれば、切り倒された巨木の上にふんどし一つで跨り、ロープで括りつけられたまま、スキーと同じようにレールの上を滑り降りていった勇氣の恐怖心は如何ばかり？さらに、その巨木が「着地」したときに受けた衝撃の強さは如何ばかり？本来なら、ちょっとしたむち打ち程度ではとても済まない大怪我になるのでは？

そんな体験を含めた1年間のハードな研修を終えた勇氣は今、中村清一社長や予喜さらに村長らから別れを惜しまれながら東京への帰路に。そして、今は「友達以上、恋人未満」（？）の存在になった直紀も、列車の窓から手を振る勇氣に対し「さよなら」「さよなら」を何度もくり返しながら見送ってくれたから、この1年間は勇氣にとっていい思い出となって再び都会での生活が始まるはず。スクリーン上ではそんな結末に向けての勇氣の行動が続いていくが、いざ東京の人混みの中を歩いてみると、何ともいえない違和感が・・・。そりゃそうだろう、スピード感から空気、臭いまで、何から何まで東京と神去村とでは大違いなのだから。

人生には、どうしても決断しなければならないコトが一度や二度はあるもの。しかして、高校卒業後の1年間で神去村の林業研修で過ごした勇氣が、東京に戻って下した決断とは？ちなみに、それは映画のストーリーとしては上出来だが、胸に手を当ててホントによくよく考えてみると、さてその決断の是非は・・・？